～倖せの土台をつくる～
ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
関係者の皆様
このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1. **新規利用者募集枠**
2. **支援ノートNo.103『支援者養成研修への提案 2』**
3. **近況**
4. **メディア関係案内**
5. **研修・講演**

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援　○　余裕あり
- ◆ 就労継続支援Ｂ型　×　お問い合わせください
- ◆ 生活介護　×　なし
- ◆ 就労定着支援　△　ftl の事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援　×　ftl の事業所を利用する方以外の受入は中止

2. 支援ノートNo.103『支援者養成研修への提案 2』

前回より、都道府県の主催で行われている支援者養成研修についての提案という意図を持って文章を書いています。既に述べましたが、僕は最近、公で行われている研修の内容の薄っぺらさに驚愕させられることが多く、そのたびに研修に参加する意欲を削がれています。報酬の加算というニンジンを目の前にぶら下げられ、こんな研修を大真面目に受けていたら、障害福祉の現場は、その質を加速度的に落としていくだろうと思うし、実際に落ちていると思うのです。当該研修は、共生社会を目指すという旗印の下に企画実施されているはずですが、結果効果は逆で、分断を煽るものが多い。それは定期的に行われる報酬改定や制度改定にも象徴的に現れています。この国が何を目指しているのか、もはや僕にはわかりません。

しかし、理念と現場の乖離を防ぐために、せめて批判精神を持って、これらの研修内容について考えてくれる人が現れるといいと思い、今回もキーを叩きます。前回は、①浅すぎる氷山モデル、②情緒的な交流の存在や大切さに触れていない、③伝えることではなく、伝わることへの思慮が浅い、の 3 つについて述べました。今回は、前回の予告に少し変更を加え、④社会性という課題のとらえかたが浅い、ということに触れたいと思います。

ちなみに、ここで僕が問題としている研修は、強度行動障害支援者養成研修というものですが、それ以外の研修にも通底するものが多いので、全ての人に自分事として読んでもらいたいと思います。実際にある地方公共団体が公として毎年実施しているもので、そこで実際に最近使われた研修資料を読みながら、どこがどうおかしいのかということと、そ

れを意味あるものにするためには何が必要なのかという切り口で文章を書いていきます。

④社会性という課題のとらえかたが浅い

前回にも少し触れましたが、この支援者養成研修には、『特性確認シート』というものが資料として配布されています。このシートは、氷山モデルの中身を埋めていく際に、書き込まれる内容を誘導する役割を果たします。シートには、「支援のアイデア」という項目があり、アイデアというよりは、ほとんどマニュアルのようなものが書かれています。そのアイデアを導き出す筋が、表としてまとめてあります。まず、課題となっている行動（本人が困っている行動）という大項目があります。これが題になっていて、以下が表になっています。まず、困っていることの原因とおぼしきこととして中項目に「社会性」「コミュニケーション」「想像力」「感覚」の 4 つがあげられています。さらに、この 4 つについてのぼんやりとした例が書いてあり、それぞれへの「支援のアイデア」が導き出されていきます。

ここに書き出されている「社会性」「コミュニケーション」「想像力」「感覚」の 4 項目のうち、最初の 3 項目については、おそらく、ローナ・ウィングが 1996 年に従来のカナー型自閉症とアスペルガー障害を統一的に理解するために共通の特徴として抽出した、通称『ウィングの三つ組』からもらってきたのでしょう。ただし、最後の「感覚」というのは、ウィングの三つ組には入っていませんから、これは最近流行の「感覚過敏」を付け足したのでしょう。ウィングは、この三つ組障害が起こってくる原因を中枢神経系（脳）に求めました。そして、この支援者養成研修においては、平成 25 年度に厚生労働省が発行したリーフレットに記載されている「強度行動障害になりやすいのは、重度・最重度の知的障害があったり自閉症の特徴が強い『コミュニケーションが苦手な人』です」という一文を引いて、だから自閉症のことを学ぶことが必要だとしています。ここで一気呵成に、「ウィングの三つ組＋最近流行の感覚過敏」を強度行動障害というカテゴリーに入る人によくある課題として規定するに至っています。そして、研修では強度行動障害という状態になる原因を自閉症の人たちにありがちな中枢神経系（脳）の素因からくるものであると同定し、対策としての「支援のアイデア」も、それのみに焦点を合わせたものが提示されています。ここまで解説して、僕の思考回路はショートします。論理が飛躍しすぎていて、まるで詐欺ペテンの被害に遭っているような気分になってしまうのです。さしあたり、詐欺ペテンの被害者は、第一に福祉施設の利用者にあたる人たちであり、第二にそこにいる支援者たちでしょう。

詐欺師は、もっともらしいことを言って相手の懐に入り込みます。僕に言わせると、上記のことはどれももっともらしいことではありますが、大きな脈絡としての筋が通っていません。風が吹けば桶屋が儲かる式に論理を飛躍させて、自閉スペクトラム症における中枢神経の発達遅滞を強度行動障害の原因に仕立て上げています。しかし、真剣に現場でこの問題と向き合っている援助者たちは、強度行動障害という状態像がこんな単純な直線的因果律から起こっているものではないということに、直感的に気付いているはずです。実際に激しく混乱している対象者を前に、このような単純な解釈と、それに基づく支援というものが如何に無力であるか、痛いほどに感じているはずです。逆説的ではありますが、単純な直線的因果律から導かれた原因論とそれに基づく対処で問題が解決する対象者につ

いては、強度行動障害などという仰々しいレッテルを貼る必要すらないと言い切れます。

おそらくこの研修は、支援者側にある問題を明らかにしていません。この支援者養成研修は、徹頭徹尾、対象者の課題と、それに対する支援のアイデア（着想）を教授する形をとっています。まずはそこが大きな問題です。僕は、それらの着想を見て、根本的な見立て違いや、そこに至る思弁の浅さを感じてしまうのです。この浅さでは、研修で言われる「一人ひとりにわかりやすい」援助をするのに不可欠な、個別に違うエビデンスを見つけ出すことはできません。

まず、見立てについて言うならば、明らかに援助者と対象者とで作り出す関係性の問題を避けて通っています。その結果、当事者性のない着想しか出てこないという結果に至っています。関係性とは何かというと、その一番単純な形は「私とあなた」そのものです。「私」だけでは成立しないし、「あなた」だけでも成立しない。よく、事例検討などをするときに「このケースは･･･」などと発表者が述べることがありますが、その時に僕が側耳を立てて感じとろうとするのは、発表者が言う「ケース」の中に、発表者自身が含まれているかどうかです。そういう視座を持ちながらこの支援者養成研修を見ると、「私」が全く含まれていないということに気づいてしまいます。その時点で、この講師は現場人としての感性を持っていないことを証明していると僕は思います。「私」抜きに「あなた」を語ろうとするから、自転車のパンク修理よろしく、タイヤチューブの穴を見つけて、そこにパッチを貼り付けて、穴を塞げば、パンク修理は完了し、あとは空気を入れるだけで走行できるようになる、というのと同じような着想ばかりが並ぶのです。太郎さんは、言われていることの意味がわからない。だから、わかるように提示すればいいなんて、そんな単純な話だけが堂々と公の支援者養成研修で語られ、それ以上のことは何も語られないなんて、全くどうかしています。それは確かにエビデンスに乗っ取ったアイデアですが、このアイデアは同時に、こじれた状態になっていない人たち（＝このアイデアを必要としていない人たち）には通用するけれど、強度行動障害とされる、対象との関係や距離感がこじれ切った状態の人を救うのに有効なアイデアではありません。場合によっては、欠けていたって大勢（たいせい）に影響のないようなアイデアです。もっと言うならば、誰を対象にしたとしても、このようなアイデアを一方的かつ漫然と押しつけ続けていたら、いずれは強度行動障害という概念に当てはまる状態になってしまうでしょう。僕は実際に、そういう事例をたくさん見てきています。例えば、あの津久井やまゆり園事件で犯人がターゲットにした『意思疎通のできない障害者』の多くは、これに当たるでしょう。彼や彼女らは、最初から意思疎通ができなかったわけではないのですから。

繰り返しになりますが、このような幼稚園児にものを教える時のセオリーで彼や彼女の生活が好転するのであれば、その対象者をわざわざ強度行動障害だなどと言う必要はないのです。それこそ、施設や支援者は、加算がほしいから対象者を強度行動障害にし、塩漬けにしているだけなんじゃないかと疑いたくなります。もちろん、そんな意識で福祉施設をやっている人はいないのでしょうが、罪なことを罪だと気付かずに善意でこれをやり続けられることのほうが、事態は深刻なのです。もちろん、僕は福祉施設職員だけに向けて悪態をついているのではありません。「知的・発達障害者はどこにでもいるけれど、どこにいるのかよくわからない」存在ですから、この地球上に生きている全ての人が対象になります。当然、僕自身も含めての話です。

こんな深刻な事態をいつまでも放置しておくのは善くないので、この『特性確認シート』については、一つ一つ検証していこうと思います。まず今回は、『特性確認シート』で課題の第一にあげられている「社会性」について考えてみます。言うまでもなく、僕らが援助するのは社会性の荒廃ではなく、社会性の発達ですから、その文脈で以下に書き進めます。

三次元の複雑系である『発達』をこの研修のように一次元に押し込めて説明すると、何かわかったような気になりますが、それは浅い読みであることが多く危険です。特に、この研修でも背景にチラチラと見え隠れしている行動主義心理学（SR 理論や ABC 理論）は、元来、地球を覆い尽くしている大気や刻々と変化する気象状況の如き大きな物語の中に舞う塵の動きを部分的に切り取って直線的因果律で説明しているに過ぎないのだというアンダーステートメントを前提としたときに初めて意味を持つものです。そのことを理解していない支援者は、この理論をしたり顔で振り回し、ろくでもない支援擬きをします。

三次元の複雑系である人間の成熟とは、「関係性」と「認識能力」と「自分の身体を制御する能力」が互いに強く影響を与え合いながら育ち、それが精神発達としての豊かさに収斂されていくものだと言われます。（滝川一廣 Dr.） ここまで説明するとわかる人はわかると思いますが、この支援者養成研修においては、「自分の身体を制御する能力」というベクトルが不当に軽んじられています。もし、当たり前のことだから説明を省いたと言うならば、それこそ大間違いです。「自分の身体を制御する能力」が育つということがいかに奇跡的なことであるか、いかに多くの偶然と出会いに支えられて育つものであるか、自分自身を振り返ってみればわかるはずです。そして、その制御能力が育つから、関係性も深まり、その幅も拡げやすくもなるし、認識能力も高まって比較や推論をたてられる、すなわち、社会生活に必要な思考能力や判断力を得られるようにもなるのです。しかし、この発達を援助するには、彼や彼女と関わり合う人たちの意志が問われます。その意志とは、個人因子としての課題を持つ対象者を仲間・隣人として迎え入れようとする意志です。ただし、これはとても難しい。

例えば、東京都国立市はフルインクルーシブな教育を実施するという決断を既にしています。これを僕は、育つということがいかに奇跡的なことであるか、いかに多くの出会いと偶縁学習を生かさなければできないことであるか、という事実を具（つぶさ）に見つめた結果であると思いたい。何故かというと、そこに起点を置かなければ、この構想は間違いなく失敗するからです。国立市が組織としてこのような決断をし、現場でこれが実行に移されるときに、現場は必ず成果を上げられるか否かの隘路に立たされます。現場は、狙いに近い成果を出すために、前述の単純すぎる直線的因果律（実証主義）で人の発達や成熟をとらえる傾向に対して、禁欲的になる必要があるでしょう。真に必要なのは、直線的因果律（実証主義）に偏らず、円環的にものごとを考察する姿勢です。それは、相互関係や相互影響を重視（考察）しながらの援助だと言い換えてもいいでしょう。僕のいる職場では、利用を開始する人について、必ず生育歴を聴き取る作業をします。その時に注意しているのは、生まれてから今に至るまで、時期ごとに起きていることを時系列にそってプロットすることです。まずは、その時々に起こっていること、偶然起こったことについて、区々にある価値を棚上げにして、ひたすら時系列に沿って書き込みます。これは、直線的

な因果律にはまらないための工夫であり、事件と状況は違うという意識を保つための流儀です。一方、支援者養成研修でアイデアと称して出されている支援方法は、どれも事件に対応しているだけのものであり、そういう意味で、対になる鍵と鍵穴が合致する前提での話です。ところが、深刻に状態の悪い人というのは、そんな単純な反応のなかにいるわけではありません。いくつかの事件が積み重なり、全人格的・全体的な反応として、悪い状態に陥っているのです。

複雑な情況に陥っている人（行政用語では強度行動障害の人）に対して、実証主義的な直線的因果律の中でこの状態像を見て対応すると、中長期的には、更に状態を悪くします。人文科学的に言うならば、不幸な歳のとり方をすると言ってもいいでしょう。実証主義というものは考察が浅くなりがちで、そうなると対象者の心に迫れません。心を満たしているものは感情であり、言葉も思考も感情という大気圏に出現する風・雨・雪・稲妻・台風・竜巻のようなものに過ぎません。山鳥重 Dr.は、脳と心を「知・情・意」という古来から使われている分類方法で解説した時に、知や意は情という大海に浮かぶ船、泳ぐ魚にすぎないという意味の話を『知・情・意の神経心理学』など、たくさんの著書に書いています。僕も、全くその通りだと思います。だからこそ、言葉になる直前、皮一枚下まできている律動を感じ取る力を磨くことが、最も大事な研修課題になるはずです。ところが、地方公共団体が公として実施している加算対象の研修で、このような大切なテーマに触れられることは殆どありません。これが日本の障害福祉を蝕んでいる原因のひとつであることは間違いありません。

ところで、『特性確認シート』を読むと、「社会性」の課題は、次の 2 つに分けられています。ひとつは、「ひとや集団との関係に難しさがある」ということ。もうひとつは、「状況の理解が難しい」ということです。さらに、この 2 つの課題については、背景となる特性が解説してあります。前者の背景特性とは、「相手への関心が薄い」「相手から期待されていることを理解するのが難しい」「相手が見ているものを見て相手の考えを察することが難しい」の 3 つ。また、後者の背景特性とは、「周囲で起こっていることへの関心が薄い」「周囲の様子から期待されていることを理解することが難しい」「見えないものの理解が難しい」の 3 つ。社会性が課題となる背景は合わせて 6 つあるとされています。しかし、社会性の課題である「ひとや集団との関係に難しさがある」ことと「状況の理解が難しい」ことの背景にある、それぞれ 3 つずつの特性は、言い回しを変えているだけで内容は一緒です。したがって、この研修で言われている社会性の課題背景を僕にまとめさせると、「対象との関係性が薄い」「自身に投げかけられていることの意図がよめない」「認識能力の発達が遅れている」という 3 つに集約されます。しかし、「社会性」の発達障害（遅滞）という遠大なテーマについて、その背景をこの 3 つに集約して説明してしまうことの安直さというか、ひとを小バカにしたようなまとめかたに、僕の思考回路はショートするのです。

しつこいようですが、この支援者養成研修では、対象者が課題とされる行動を起こしてしまう原因を非常に浅くとらえているのが特徴です。例えば、人や集団との関係に難しさがある場合、「相手への関心が薄い」「相手から期待されていることを理解するのが難しい」「相手が見ているものを見て相手の考えを察することが難しい」という 3 つの原因を

あげています。要するに、相手の言っていることがわからない、見通しがたたないから混乱して暴れるという、非常にわかりやすい直線的因果関係で説明して見せます。従って、それに対するアイデアも、「具体（視覚）的に伝える」の一本調子になります。しかし、僕が知る限り、本当に処遇が困難な対象者というのは、こんな付き合い方で周囲と折り合いがつくことはありません。いくら PECS を用いて具体的に伝えられたとしても、伝えられた内容と実感することとの間には乖離が大きいし、自分の動きと自分が望む動きとがずれてしまっている。そういう状態にいる彼は、他者と折り合う以前に、自分自身と折り合えなくて苦しんでいるのです。我々は、自分と折り合える限度においてしか他人と折り合えません。そのことに気付かずに、ひとりよがりの対応を続けると、折り合いのつかないまま、精神発達の基礎となる関係性は希薄となり、認識能力も歪み、自己制御能力も機能せず、自分自身や他者や物を破壊するような衝動性を増すことになります。こういう厳しい情況に追い込まれた青年と一緒に折り合い点を見つける共同作業については、僕自身の体験談として拙著＊の中に複数書いているので、ここには書きません。ただ、それらの事例を読んで勘違いしてほしくないのは、僕はその体験談を通してテクニックを伝えたいのではないということです。大事なのは、僕が本に書いたように援助実践することが、良くも悪くも、どういう風に対象者へと伝わったのかということです。伝えることよりも伝わることのほうが百倍大事なのです。僕が彼の援助をするということが「僕は君に匙を投げていないということだ」という証拠として伝わり、彼がそれを実感することで、彼自身が現実と折り合えるようになるかもしれないという希望を持つことが援助の本質なのです。それは、『特性確認シート』の中に書かれた支援のアイデアに欠落しているものでもあります。

入所施設の泊まり勤務で、激しい行動を起こす彼を目の前にした職員は、一番に何を考えるべきでしょうか。なんとかして彼を居室へ押し込んで施錠をする「タイムアウト」という名の身体拘束でしょうか。それとも、頓服薬を飲ませるタイミングについてでしょうか。たまたまなのかもしれませんが、僕の場合は、そういった選択をしたことが一度もありませんでした。ただし、僕自身が心の中で、ある言葉を腹の中で呟いてから彼と向き合ったことは、幾度となくあります。
「地獄の底まで付き合うぞ」
もちろん、口には出しません。しかし、匙を投げないという僕の態度は、意図せずに、かなりの確率で彼に伝わっていたのかもしれません。この言葉を腹の底に据えて彼や彼女の横に座るだけで、彼と彼自身とが折り合え、彼と僕とも折り合いがつき、僕の脈に彼の脈が同調するかのようにして彼の脈拍数が下がります。つり上がっていた彼の眼の奥に、本来の優しくて深い光が戻ってくることが多いということも事実なのです。そして、そういった時と共同作業という体験とを分かち合うことこそが、関係発達・認識の発達・自己制御の発達を促すし、ひいては彼の精神発達の基礎にもなるのだと思います。

最後に、もう一つだけ『特性確認シート』の中に書かれた支援のアイデアに欠落しているものをあげておきたいと思います。混乱した状態にある対象者が、その混乱から抜け出して行く過程というのは、彼が社会の中に座を占めようとして活動する過程でもあります。

社会の中に座を占める過程において不可欠なのが、友人であり、隣人であり、仲間です。そして、その存在がある場でもあります。これは、発語のある人もない人も全て含めて言えることです。あるいは、『特性確認シート』に記載されている「相手への関心が薄い」ように見える人であっても同じことです。「関心が薄い」ことと「関心がない」こととの間には天と地ほどの差があるのです。

では、対象者がそういった場に関心とつながりを持つ過程において、僕たちにどのような援助ができるのかというと、控えめに言っても援助者にできることというのはたかが知れているような気がします。せいぜい、それらしい場を見つけて、偶然に関係ができ、その座を占めていくのを楽しみにしつつも、半歩遅れて見守るような感じになってしまいます。つながりというのは、人と人との相互作用ですから、彼らが何か凄い判断と決断をしているという雰囲気でもありません。日本人的な言い回しになりますが、「自然とそうなった」という風情です。

自然と仲間ができ、そこに座を占めていく過程での相互作用とは、刷り込みや条件反射の他に、フィーリングとしか言いようのない、意識されない物理的な感覚が複雑に関与しているかもしれません。視聴覚的な情報提供という操作可能な範囲を超えた水準で何かが起こっているのでしょう。例えば、音調、沈黙、間（ま）、嗅覚、温度覚、触覚、息づかいなどが、視覚的な情報をしばしば凌駕することは、現場にいるものであれば実感するところでしょう。

ただし、このような相互作用が起こるためには、そこに相手がいて、互いのフィーリングを感じ合えるだけのゆとりがあることが不可欠です。つまり、僕たち援助者が、絶対にやってはいけないことがあるとすれば、それを剥奪するような行為でしょう。支援という名の下に「苦手な刺激を少なくするための配慮をする」という方法がとられることの多い昨今ですが、それが本当に「配慮」の範囲にあるのか、それとも対象者が社会の中に座を占めていく過程において、ゆとりを得る際の障壁となるような「剥奪」なのかについては、その場と実感を対象者と分かち合ってから決まるものです。分かち合わずに刺激を少なくするという「緊急一時保護的な対策」を漫然ととりつづけるのであれば、何をもって、その効果の有無や有益であるか有害であるかを評価するというのでしょうか。

これらのことは、全て、強度行動障害と言われるような状態から脱出するための必要条件だと思います。果たして、これが地方公共団体の行う公の支援者養成研修の中で語られることはあるのでしょうか。

つづく

＊『家族で支援する発達障害　自立した進学と就労を進める本』 河出書房新社
＊『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』　学事出版
＊『飼い殺しさせないための支援』　河出書房新社

令和 6 年 3 月 17 日
髙原浩

※　支援ノートの文章は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

3. 近況

【就労移行支援　ftlビジネス・スクール】 新規利用者募集中

知的発達症を含む神経発達症や精神疾患のあるかたたちが、実践的な環境で企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な経験を支援者と利用者とで分かち合いながら行うことを目指します。

基礎訓練段階からのトレーニングが必要な方にも利用しやすい就労移行支援事業所です。療育的な視点で再評価し、個々にボトルネックになる課題を明確にすることで、具体的な傾向と対策を共有しながら就職に向けての援助を行います。

就職後にできるだけスムーズに職場定着できることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年半）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

令和6年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

http://www.ftl-1.co.jp/contact/

【就労継続支援B型　ftlビー・ワーク】お問い合わせください

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。長い目でみつつ企業就労を明確な目標にしている方が利用しています。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

http://www.ftl-1.co.jp/news/20220107/483/

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自己効力感を上げ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業　ftlビー・ワーク】見学のみ可

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』を中心に据えた生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障するこ

とを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域社会参加プログラムも実施しています。
http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/

【就労定着支援事業】ftlの事業所を通過した方のみ利用可
　就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。
https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL

【計画相談支援　ftlアクセス】ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております
　児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

＊ 土曜プログラム・特別プログラムについて（ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です）
　土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。
① どだいの会（身体感覚の発達・状況判断能力・社会性を発達させます）
社会適応の障害になり得る発達の凸凹や遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えるときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室（PC技能訓練）
　WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。

③「和太鼓講習」
市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。
https://www.fujimitaiko.com/
和太鼓の良さは次のような点にあります。
○音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
○耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
○アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
○腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気で、楽しく真剣に学びます。

スマホ依存やゲーム依存を予防する学習や、口腔ケアなどの健康管理に関する学習などを普段とは違った雰囲気の中で、楽しく学ぶことができます。

⑤“自立講座”“OBとの交流会”等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

4. メディア関係案内　**（全て、全国の書店やインターネットから購入できます）**

○『家族で支援する発達障害　自立した進学と就労を進める本』

髙原浩 監修　河出書房新社

https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で､自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○**『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』　髙原浩　著　学事出版**

https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html

重版（3 刷）好評発売中です。

○**『飼い殺しさせないための支援』　髙原浩 著　河出書房新社**

＊全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。

http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/

○**『現場発！ソーシャル・インクルーシブとインクルーシブ教育』髙原浩 著 学事出版**

https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルーシブ教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

https://www.kyoiku-press.com/post-211922/

○ジョブメドレーアカデミー　オンライン研修講師として登壇中（下記リンクは、案内のみです）

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

https://jm-academy.jp/syougaifukushi
○ NPO 法人 日本インクルーシブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座
『対人援助のコツ ～非施設的実践の現場から～』
https://x.gd/TaItY
https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#i1-3

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

5. 研修・講演について

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

info@ftl-1.co.jp

http://www.ftl-1.co.jp/

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

令和6年3月17日
ftlビジネス･スクール/ftlビー・ワーク
施設長･サービス管理責任者　髙原浩